
IS<インフィニット・ストラトス> 転生者が色々する話

ギャレオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>インフィニット・ストラトス< 転生者が色々する話

【Nコード】

N6961Q

【作者名】

ギャレオン

【あらすじ】

神の手違いで死んだ主人公は、インフィニット・ストラトスの世界で原作道理に進ませながら色々します。

1話 転生

俺はISの最新刊を買ってた．．．はずなんだが？いつのまにこんなところに来たんだ？

今俺がいるところは何も無かった。いや、ほんとに。

「あ、あの！」

「ん？」

気がつくと後ろに．．．天使？がいた。うん、翼も生えているし、こんなとこだし、天使でいいだろう。

「すいませんでしたー！ー！」

「いや！なんで？」

さっぱりわからない、なにが起きたんだ？

って自己紹介を先にしておこう、俺の名前は八神^{やがみ} 恭弥^{きょうや}。けっしてはやてではない！

「なにがあつたか、言ってくれ」

「あ、はい。えーと実は、間違えてころしちゃいました」

「．．．．．は？」

「だから、あなたは死んでいて、死因は私のせいなんです」

「ってことは、俺はもう死んでる？」

「はい、残念ながら」

「そうか……」

「で、でも！元の世界には戻れませんが、あなたが買った、その本の世界に転生させます」

「ホントか！それなら、能力は？」

俺が買った本というのは、インフィニット・ストラトス。この頃アニメ化された作品だ。

「はい、可能です」

「そうか、それならまずISを使えるようにしてくれ。後完全記憶能力と超電磁砲」

「分かったわ……もう時間ね、それでは、さようなら」

「んじゃーな」

そして俺は光りに包まれた。

主人公設定

八神 恭弥 やがみ きょうや

容姿

リリカルなのはの八神はやてっぽい髪型の茶髪。

性格

ものすごく切れやすい

能力

完全記憶能力、超電磁砲

身体能力がチート（超上空から飛び降りても足がしびれるだけ）

魔法

リリカルなのははやてぐらい。

IS……アルト

恭弥の愛機。東オリジナルのIS。動きは速く。そして硬い。形状

赤椿＋アルトアイゼンで色は黒。

肩、腕、頭部がアルトアイゼン。それ以外は赤椿。

武器

3連マシンキャノン

左手に装備された固定武装。

リボルビング・ステーク

右腕に装備されたリボルバー式の杭打ち機。

スクエア・クレイモア

両肩部に大量に内蔵されたチタン製のベアリング弾。

シュベルトクロイツ

ただの槍。

ブラスタービット

ビット。形はリリカルなのはのレイジングハートのビット。

ブラウクンマグナム

ネタ武器。手からエネルギー弾を撃ち出す。

2話

転生してかあ15年が経った。ん？速いだと。気にするな、まあいろいろあつたんだ。

「んじゃ、東ねえ行ってくる」

「うん、行つてらっしゃい。それといっくんと篝ちゃんによろしく」

そう、きょうからIS学園、原作開始。なんとか、ISも使えて、体もチート（いろんな意味で）だった俺は入ることができた

「一夏と篝、元気かなあ」

あいつらの顔見にさっさと行くか……

「全員揃ってますねー。それじゃあ^{ショートホームルーム}SHRはじめますよー」

黒板の前でにつこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生。

身長はやや低めで、生徒のそれと殆ど変わらない。しかも服はサイズがあつてないのかだぼつとしていて、ますます本人が小さく見える。また、かけている黒縁眼鏡もやや大きめなのか若干ずれている。

「それでは皆さん、1年間よろしく願いますね」

「……………」

原作通り教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰も反応してなかった。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

俺は、反応するか迷ったが、空気に無理だった。

なぜか。

俺と一夏を除く全員が女子だからだ。こんなん無理に決まってる。落ち着ける奴は、ギャルゲーの主人公ぐらいだ。

「……………くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

一夏は呼ばれたのも気づかなかった。

それから一夏は山田先生になにやらいろいろ言われてから、自己紹介していた。

「えー……………えっと、織斑^{おりむらいちか}一夏です。よろしくお願いします」

「以上です……………って筈?」

お、あいつは筈を見つけたようだ。だが、声に出したのがいけなかったようだ。

パアンッ!

「いつ——！？」

後ろから出席簿がクリーンヒット。主席簿ってあんな音なるんだなあ。

一夏が振り返ったら、ある人物がいた。

「げえつ、関羽！？」

バアアンツ！

さつきよりも強く叩かれていた。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

そこには、関羽・・・もとい千冬ねえがいた。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと……………」

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠^{じせいかん}15才を16才にまでに鍛え抜くとこだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

さすがに暴力発言すぎだと思っるのは気のせいだろうか。うん、気のせいだろう。そういう事にしておこう。

そんなことを考えてた俺はこの後の黄色い声援を忘れていた。

「キヤーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

とか、

「私、お姉様のためなら死ねます」

とか……これは誰が聞いても、うっとうしいと思う。

もうね、うるさすぎてテンションダウン。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。関心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

やっぱり千冬ねえはきゃいきゃい騒ぐ女子達がかなりうっとうしそうだ。それにすらも叱って、罵って、躰けてなどと黄色い声がとんでいる。

んで、いろいろあつて、俺の自己紹介の番。

「では、最後に……八神恭弥くん」

「はい、……」

俺のテンションはさっきの騒動でおもいつきりダウンしていた。

「八神恭弥です。趣味はボクシングとプログラミング。以上」

俺も世界で2人目のISが動かせる男子だからか、さすがに騒いでいたが、チャイムがなって別の先生が入ってきたので騒ぎは収まった。

IS学園はコマ限界までIS関連の教育をするため、入学式当日から普通に授業が入っているのだ。

そして一時間目のIS基礎理論授業が始まるのだった。

3 話（前書き）

主人公設定修正しました

2 話冒頭に転生してから IS 学園に入るまでを追加したので、
そこまで意味はありませんが暇な人は見てください。

3話

1時限目がなんとか終了した。

IS基礎理論授業？完全記憶能力なめるなよ。全部頭の中に入ってる……意味は分かんがな。

授業は終わった。だが、この教室内の異様な空気はどうしようもないのか。

（しかし、どうにかならんのか？）

クラスの俺と一夏以外は全員女子。それにくわえて他の生徒も来るもんだから、教室周辺はすごいことになっている。

隣の女子を見ると、それまで俺に向けていた視線を慌ててそらす。そらしてくれるのはいいが、できればその『話しかけて！』という雰囲気もどっかにやってほしい。

（誰か、この状況を助けてくれ……さすがにきつい）

もともと人見知りなのに加えて、女子との交友関係が驚くほど狭い。なので、この状況は非常にまずい。

（まあ、今はこの体のせいで、ちょっとはましになったが………）

「……………ちょっといいか」

「「え？」」

突然話しかけられた。しかも俺たち二人に。この声は？まさか．．．

「「……………箒？」」

「……………」

目の前にいたのは、．．．何年ぶりかの再開になる幼馴染にして、俺の姉的存在その3。篠ノ之箒だった。

「廊下でいいか？」

ん？なんだここでは話にくいのか？ま、この状況を抜け出すためならなんだってするさ。

「早くしろ」

「お、おう」「分かった．．．」

先に行ってしまう箒。まあ、なんだ。一夏がモーゼの海渡りって言うてたのが分かる気がする。

それで、廊下に出たのはいいんだが、俺達と箒から4、5メートルほど離れた包囲網が完成してるのであまり意味がなかったりする。

「そっいや、箒」

そっちから呼び出しといてなんにも言わない箒の代わりに俺から話しかけた。

「何だ？」

「去年の剣道の全国大会優勝おめでとう」

「……………」

篤は俺の言葉を聞くなり、口をへの字にして顔を赤らめた。なんのだ？

「なんでそんなこと知ってるんだ」

「そりゃあ新聞載ってたし……………」

「な、なんで新聞なんか見るんだっ・じゃなくてお前日本にいたのか！なんでどっか行ったんだ！？」

あ、ばれた。

「2、3年前に帰ってきたんだ。帰ってきたときはお前んとこ行けるほど余裕なかったからな」

「……………」

さつきからどうしたんだろ？顔が真っ赤になってる。

キンコーンカーンコーン

おっと時間切れか。なんか短い気がするがにしないでおう。そういや、一夏が空気だったな。ドンマイ。

パァン！

「早く席に付け、八神」

「……………はい」

完全記憶能力があるのに俺の頭がどんどん馬鹿になってるのは昔からこの人がたたきまくってるからではないだろうか？

……………2時間目が始まって数十分後一夏が千冬ねえに叩かれていた。どうやら、参考書を、間違えて電話帳と思って捨てたらしい。やっぱり馬鹿だな。

まあ…………俺も完全記憶能力無かったら一夏以上の馬鹿か……………
……………なんか悲しくなってきた

とりあえず山田先生がこけたことと俺が自爆して心にダメージを受けたこと以外何もなく終わった。

4話（前書き）

遅くなって申し訳ございません

4話

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」「ああ？」

2時間目の休み時間。

俺達はいきなり喋りかけられて驚いていた。

話しかけてきた人は、まあ、うん、例の、あの金髪でちょっとロールがかかった髪の人っすよ……

「訊いてます？お返事は？」

さっきの人（まあ誰かは分かっているんだが、）が、訊いてきた。

「あ、ああ。訊いてるけど………どういう用件だ？」

一夏がそう答えたら、目の前の女子はわざとらしく声を上げた。

「まあ！そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんだはいかしら？」

「「……………」」

……はつきり言っていらないんだが、
まあ我慢しよう。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「俺もだ」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補性にして、入試主席のこのわたくしを！？」

はい、予想道理セシリアでした。

「あ、質問いいか？」

「ふん、下々のものの要求に応えるのも貴族のつとめですわ。よろしくてよ」

「代表候補性って何？」

「がたたっ！がたん！クラスの女子が大半ずっこけていた。やっぱりコイツ馬鹿だ。」

「代表候補生ってのは、簡単にいえばエリートだな、まったくこれぐらい俺でもわかんぞ」

「そうなのか」

「そう！エリートなのですわ！」

おお！復活すんの早！通常の3倍・・・もないか。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解し

ていただける？」

「「そうかそれはラッキーだ」」

一夏とはもった！棒読みっぷりまではもったぞ！

「……あなた達馬鹿にしていますの？」

お前が幸運だつて言ったんじゃないか？あれ？違うのか？

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。世界中で2人しかいない男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思ってましたけど、期待はずれでしたね、こっちのほうが十分ましですわ」

セシリアがそう言つて黙つて黙つて聞いていた俺を指差した。

「そりやどうも」

正直言つて、全然嬉しくない。なぜだろう？原作キャラと話してんのに。

「俺に何かを期待されても困るわけだが」

一夏がそう言つが殆どスルーされ

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

これが優しさと言えるのは多分、お前ぐらいしかいねえ。

「ISのことわからないことがあれば、まあ．．．泣いて頼まれたら教えてあげても良くつてよ。なんせわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

そりゃ専用機体対量産型つて先生方勝てたら奇跡だろう。

ん？俺？専用機で勝てないほうがおかしい。練習もしてたしな。

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

一夏がそう言い出した、そういえばお前倒したんだっけ？すっかり忘れてたぜ。

「ああ、俺も倒したぞ」

「は……？」

セシリアがめちゃくちや驚いてる

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではつてオチじゃないのか」

ピシッ！氷にひびが入ったみたいな感じの音が聞こえた。一夏ナイス！

「つ、つまり、わたくしだけではないと」

「まあたぶんそうなんじゃね？」

俺がそう言うが・・・

「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」

「ま、まあ落ち着けて、な」

ああ、もうさっさと黙れ鬱陶しい

「こ、これが落ち着いていられーーーー」

キンコンカンコン。

3時限目のチャイムが鳴った。一夏は福音に聞こえたみたいだが、今の俺にも福音に聞こえるぜ。あのうつとしいのきらいなんだよなあ。一夏との模擬戦後のセシリアはいいんだが……………

「つ……………！またあとで来ますわ！！逃げないことね！よくって！？」

よくないとか言っても俺立ちに拒否権はないんだろ？とか思いながら俺はさっさと席に戻って行った。出席簿アタックはさけたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6961q/>

IS<インフィニット・ストラトス> 転生者が色々する話

2011年2月23日17時23分発行